

山田龍

2021 年 1 月 22 日

1 常微分方程式

1.1 課題 1

$$\frac{dx}{dt} = \frac{x + \sqrt{x^2 + t^2}}{t} \quad (1)$$

(1.1) の形の常微分方程式を解くことを考える。 $t_0 = 1, x_0 = 0$ を初期条件としてルンゲクッタ公式を用いて $t = 1$ まで計算する。

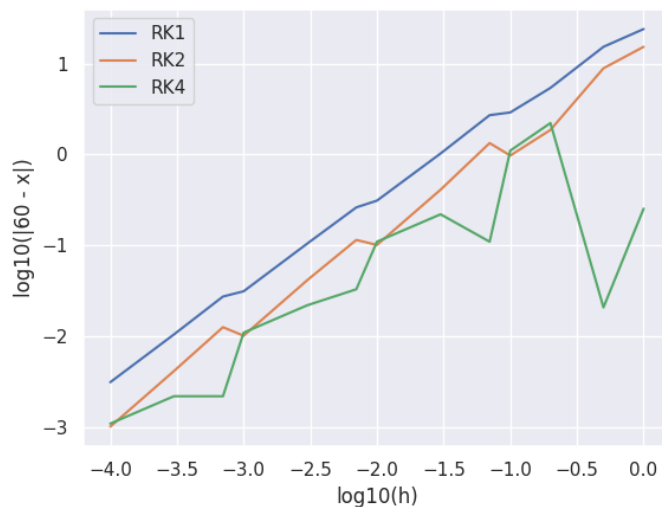


図 1 RungeKutta 法の誤差

1 次、2 次、4 次のルンゲクッタ法を用いて時間刻み幅 h を変化した結果が図 1 のようになる。横軸が刻み幅の対数、縦軸が $t = 1$ での真値からのズレ $|60 - x|$ の対数である。対数の基底は 10 にとった。どの刻み幅においても、次数の高いルンゲクッタ法が誤差が少なかった。またプロットの傾きがどれも 1 程度であるから、 $error \propto h$ であることがわかる。

4 次のルンゲクッタ法においてメモリを節約する工夫がある。ソースコード 1 が一般的なルンゲクッタ法の実装である。 dh を刻み幅として、 x を更新している。これをソースコード 2 のようにすると、 k_1, k_2, k_3, k_4 の代わりに、 x のコピー、 k の 2 つで計算できるようになるので改善している。

ソースコード 1 通常の 4 次のルンゲクッタ

```
while t < t_end:
    k_one = dh * f(x, t)
    k_two = dh * f(x + k_one / 2, t + dh / 2)
    k_three = dh * f(x + k_two / 2, t + dh / 2)
    k_four = dh * f(x + k_three, t + dh)
    x = x + k_one / 6 + k_two / 3 + k_three / 3 + k_four / 6
    t += dh
```

ソースコード 2 メモリを節約する 4 次のルンゲクッタ

```
while t < t_end:
    x_cur = x
    k = dh * f(x, t)
    x += k / 6
    k = dh * f(x_cur + k / 2, t + dh / 2)
    x += k / 3
    k = dh * f(x_cur + k / 2, t + dh / 2)
    x += k / 3
    k = dh * f(x_cur + k, t + dh)
    x += k / 6
    t += dh
```

1.2 課題 2

ケプラー運動をルンゲクッタ法を用いて解くことを考える。中心にある動かない質点の周りを回る質点の運動を考える。計算にルンゲクッタ法を用いると、シンプレクティックな計算法ではない、つまりステップの更新による座標変換が正準変換になっていないのでエネルギーは保存しないことを確認する。設定は

$$\frac{dx}{dt} = u \quad (2)$$

$$\frac{dy}{dt} = v \quad (3)$$

$$\frac{du}{dt} = -\frac{x}{(x^2 + y^2)^{3/2}} = f(x, y) \quad (4)$$

$$\frac{dv}{dt} = -\frac{y}{(x^2 + y^2)^{3/2}} = g(x, y) \quad (5)$$

$$(6)$$

速度の微分に関する式 (4)、(5) は中心力を意味する。初期条件は $x(0) = 3, y(0) = 0, u(0) = 0.3, v(0) = 2$ とする。また、系の全エネルギーは

$$E = \frac{1}{2}(u^2 + v^2) - \frac{1}{\sqrt{x^2 + y^2}} \quad (7)$$

刻み幅を h として、時間発展の計算方法は以下ようになる。

$$k_{1x} = h \times u \quad (8)$$

$$k_{1y} = h \times v \quad (9)$$

$$k_{1u} = h \times f(x, y) \quad (10)$$

$$k_{1v} = h \times g(x, y) \quad (11)$$

$$k_{2x} = h \times (u + k_{1u}) \quad (12)$$

$$k_{2y} = h \times (v + k_{1v}) \quad (13)$$

$$k_{2u} = h \times f\left(x + \frac{k_{1x}}{2}, y + \frac{k_{1y}}{2}\right) \quad (14)$$

$$k_{2v} = h \times g\left(x + \frac{k_{1x}}{2}, y + \frac{k_{1y}}{2}\right) \quad (15)$$

$$k_{3x} = h \times (u + k_{2u}) \quad (16)$$

$$k_{3y} = h \times (v + k_{2v}) \quad (17)$$

$$k_{3u} = h \times f\left(x + \frac{k_{2x}}{2}, y + \frac{k_{2y}}{2}\right) \quad (18)$$

$$k_{3v} = h \times g\left(x + \frac{k_{2x}}{2}, y + \frac{k_{2y}}{2}\right) \quad (19)$$

$$k_{4x} = h \times (u + k_{3u}) \quad (20)$$

$$k_{4y} = h \times (v + k_{3v}) \quad (21)$$

$$k_{4u} = h \times f(x + k_{3x}, y + k_{3y}) \quad (22)$$

$$k_{4v} = h \times g(x + k_{3x}, y + k_{3y}) \quad (23)$$

$$\tilde{x} = x + \frac{k_{1x} + 2k_{2x} + 2k_{3x} + k_{4x}}{6} \quad (24)$$

y, u, v も同様に更新する。空間座標を表示すると図 2 のようになる。原点を中心に楕円を描いている。エネルギー

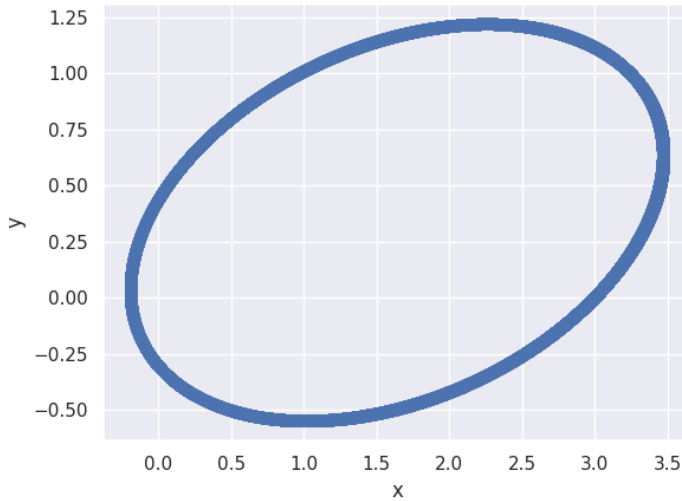


図 2 kepler 運動

ギーの変化は図 3 のようになる。刻み幅を小さくするほどエネルギーの損失は少なくなる。また、大きな刻み

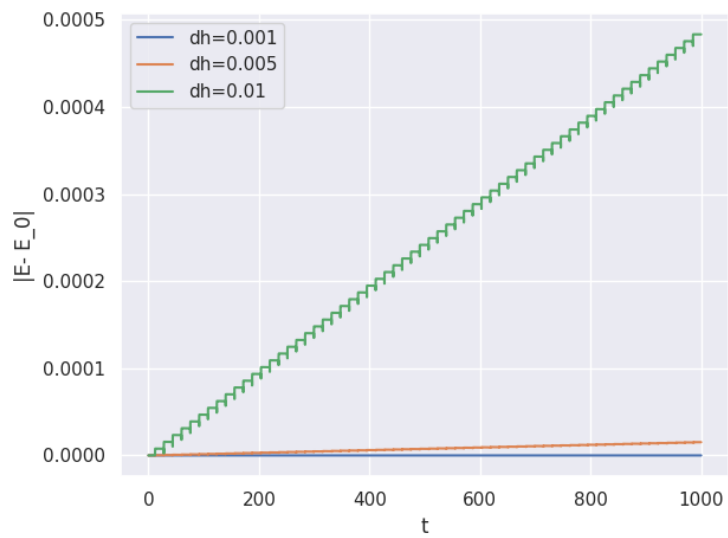


図3 エネルギーの変化

幅についても計算し両軸に対数を取って表示した結果は図4のようになる。0.01の刻み幅を境にエネルギー誤差が大きくなりシミュレーションできていないことがわかる。

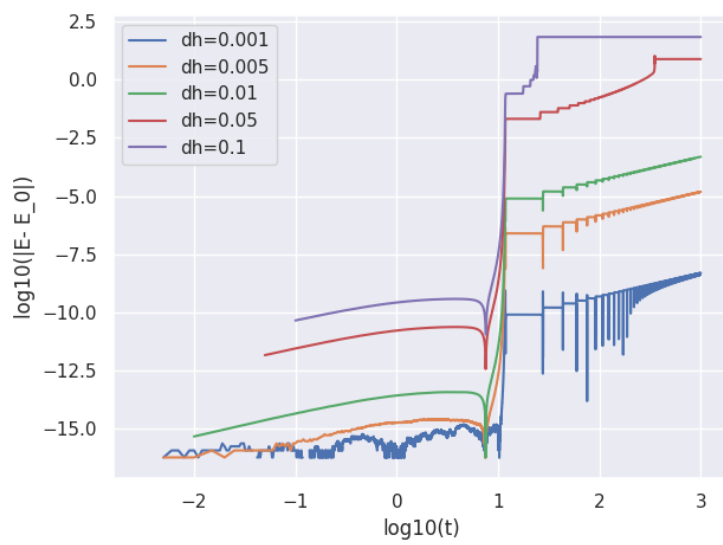


図4 \log (エネルギーの変化)

2 偏微分方程式の境界問題

2.1 課題 1

二次元ラプラス方程式

$$\frac{\partial^2 u}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 u}{\partial y^2} = 0 \quad (25)$$

を解くことを考える。一般に、境界での法線微分係数を与える (Neumann b.c.) か直接境界値を与える (Dirichlet b.c.) と内部の解は一意に定まる。ここでは Dirichlet b.c. の下で考える。二階微分は 5 点差分公式を使うと

$$f''(x_i) = \frac{-f_{i-2} + 16f_{i-1} - 30f_i + 16f_{i+1} - f_{i+2}}{12h^2} + O(h^4) \quad (26)$$

と差分化されるので、インデックス i, j で指定される二次元空間の各点において方程式を一つ得る。境界の値は与えられているので空間のグリッドを $n \times n$ に切ると、 $n - 1 \times n - 1$ 個の未知数、つまり各点での u 、を求めるための $n - 1 \times n - 1$ 個の方程式を得る。したがって、この問題は連立方程式の解に帰着できる。この方法によって、以前作成した SOR 法を用いてといた結果が図 6 のようになる。

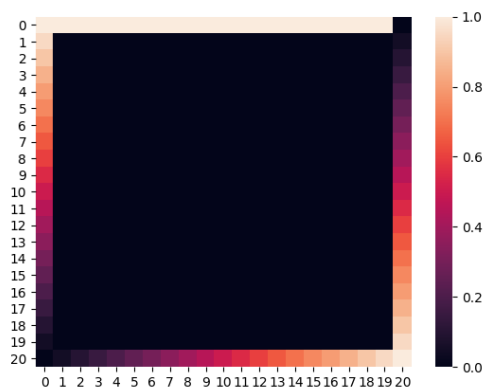


図 5 初期条件のみ表示した図

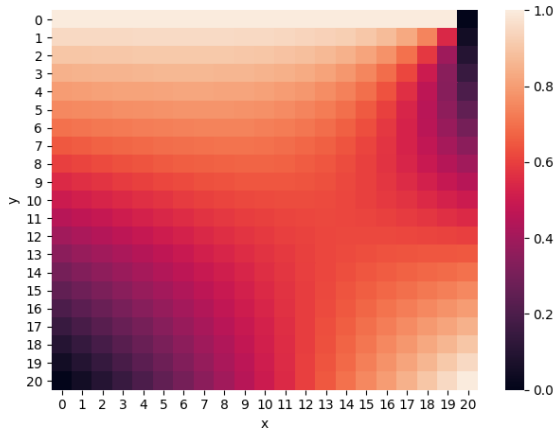


図6 ラプラス方程式の解、y 軸の目盛りは無視すること。原点は左下

3 移流方程式

3.1 課題 1

移流方程式

$$\frac{\partial u}{\partial t} + c \frac{\partial u}{\partial x} = 0 \quad (27)$$

を境界条件

$$u(x+1, t) = u(x, t) \quad (28)$$

と初期条件

$$u(x, 0) = \sin^{100}(\pi x) \quad (29)$$

の下で解くことを考える。例えば中心差分法で差分化すれば、上付き添字を時刻、下付き添字を座標に関するインデックスとにおいて、

$$\frac{u_j^{n+1} - u_j^n}{\Delta t} = c \frac{u_{j+1}^n - u_{j-1}^n}{2\Delta x} \quad (30)$$

と書ける。したがって、

$$u_j^{n+1} = u_j^n + c\Delta t \frac{u_{j+1}^n - u_{j-1}^n}{2\Delta x} \quad (31)$$

と更新される。中心差分法をそのまま使うと、図 7 のように安定ではない。しかし、4 段 4 位の古典ルンゲクッタ法を使えば安定に計算できて結果が、図 8 のようになる。風上差分法を用いれば、クーラン条件を満たしている限り計算は安定であり、図 9 のようになる。クーラン条件はフォン・ノイマンの安定性解析において更新される関数をフーリエ級数として表し、すべての波数においてスケールが発散しないことを要請した結果として現れる。風下差分法を使うと、計算が不安定になって壊れている様子も得られた (図 10)。

参考文献

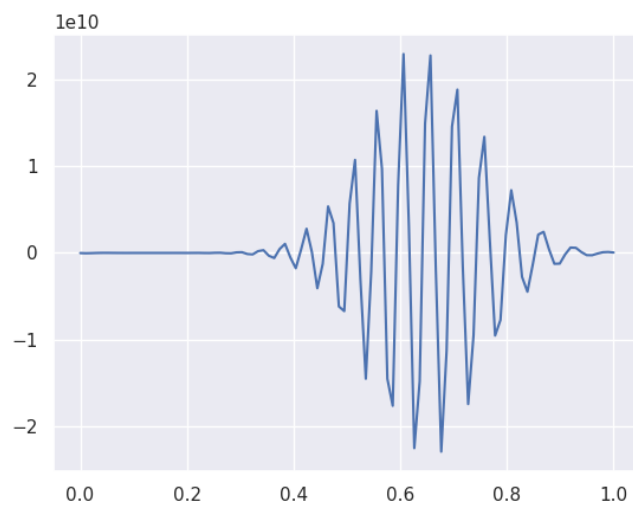


図 7 中心差分法, $t=1$ の様子

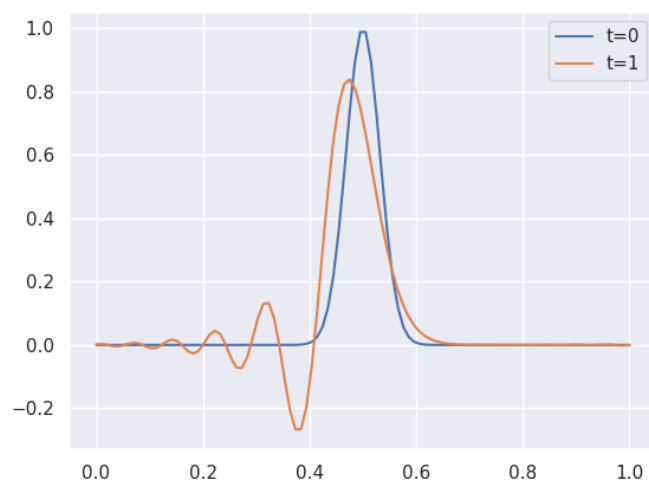


図 8 中心差分法 RK

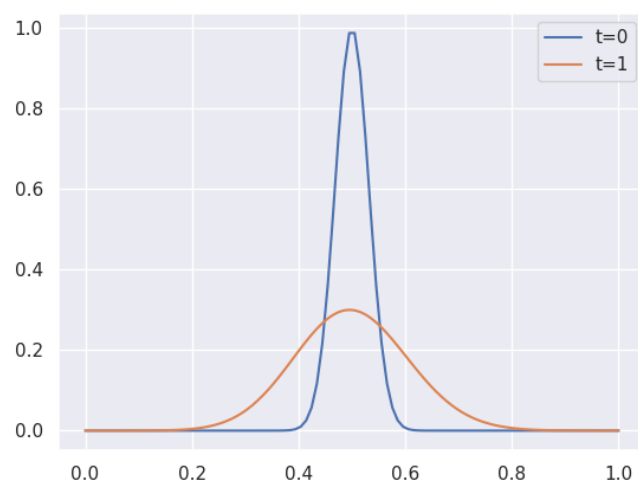


图 9 風上差分法

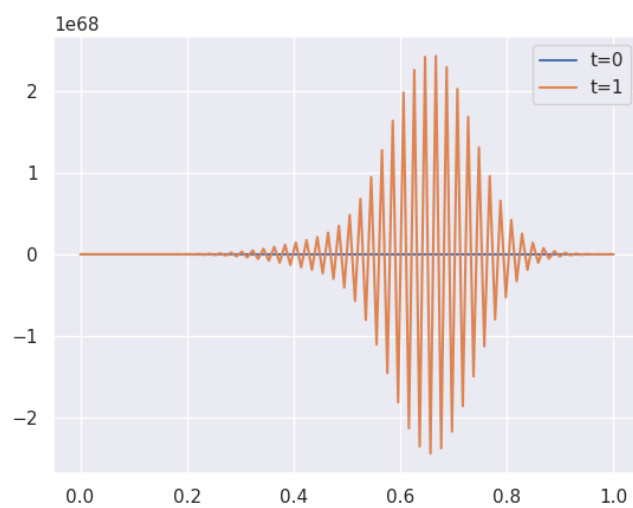


图 10 風下差分法